

1 研究主題

豊かに表現し、ともに学び合う子どもの育成
～ 複式学級における算数科の間接指導を通して ～

2 研究主題設定の理由

(1) 学校教育目標から

＜教育目標＞

「ふるさとに学び、心豊かにたくましく、夢に向かって未来を拓く田沢っ子の育成」

＜めざす子どもの姿＞

「進んで学ぶ子ども」

- ・自分の考えを上手に伝える。
- ・学習習慣を身に付け、主体的に学習に取り組む。
- ・身近なことに興味や関心を示し、疑問に思うことを分かろうとする。

本校では、これまで基礎基本の充実を図り、意欲的に学習を進め、友だちとともに学びながら「進んで学ぶ子ども」の育成に力を入れてきた。また、学校経営方針重点「小規模・少人数のよさを生かした、『考える力を育む魅力ある授業づくり』の「言語活動の充実」に焦点を当て、研究を進めている。問題解決の過程において、自分の考えを伝え、友だちの多様な考えを取り入れる活動を進める中で、「自分で考える子ども」「考えを豊かに表現する子ども」の育成に力を入れていきたい。

(2) 昨年度の研究と子どもの実態から

本校は、全校生21人の完全複式小規模校である。学習には真面目に取り組む児童が多く、集中力もある。今までの校内研究でも、「少人数のよさを生かした授業づくり」に重点をおき、授業の工夫に取り組んできた。2年生以上は複式の学習形態にも慣れ、間接指導時に授業を進める学習リーダーも役割を理解し、場に応じた指示ができるようになってきている。また、算数的活動を重視した授業を多く仕組むことによって、児童の活動が活発化し、知的好奇心を高めることができた。学び合いのパターンも多様化し、自分の考えの発表やグループでの伝え合いもできるようになってきている。学び合いを通して、仲間と学ぶ喜びを味わう姿も増えている。

しかし、どの学年も個人差が大きく、自分の考えを持つまでの段階で活動が止まってしまったり、考えを持つことができて、伝え合いの場面では、相手に考えが伝わるように、順序立てて分かりやすく説明できなかつたりする児童の姿もある。また、グループで考えを伝え合っても、ポイントがつかめず、考えがまとまらない場合もある。全体的に、学びの意識が受け身であり、既習内容を生かす力に弱さも見られる。

そこで、「自分の考えを表現し、友だちに伝える活動」を基盤とし、「自分の考えを分かりやすく表現する活動」や「友だちの考えを自分の学びに生かす活動」を積極的に取り入れ、理解を深めていきたいと考える。そのためには、自分の考えを表現するときにも操作活動を取り入れ、思考過程を残す工夫をし、自分の考えを分かりやすく表現することや、友だちの考えを理解する手がかりとしていきたい。

(3) 学習指導要領のねらいから

新学習指導要領総則に、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、「知識及び技能が習得されるようにすること」「思考力、判断力、表現力等を育成すること」「学びに向かう力、人間性等を涵養すること」の実現を図り、児童に生きる力を育むことを目指す、とある。その際、児童の言語活動など、学習の基盤をつくる活動を充実しなければならない。

数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表したり目的に応じて柔軟に表したりする力を養う。
(算数「目標」より抜粋)

このように、算数科においても「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、言語に関する力を高めていくことが求められている。考える能力と表現する能力は互いに補完し合う関係であり、自分の考えを表現しながら、自分の考えの良い点や誤りなどに気付いたり、筋道を立てて考えることを通してより良い考えをもったりすることができるといえる。授業の中では、様々な考えを出し合い、お互いに学び合っていくことができるようになることを考える。

そこで本研究では、「友だちとともに学び合う児童」を育成するために、間接指導時の言語活動を充実させ、「考えを豊かに表現し合う授業づくり」に取り組んでいくこととした。

3 重点と手立て

(1) 精一杯考えたい課題設定

①過去の考えとの「ずれ」や「隔たり」を感じさせたり、学習の対象への「あこがれ」や「可能性」、「疑問」を感じさせたりして、児童にとって必要感のある課題にする。

②児童の興味関心を高めるために、導入で、具体物を用いたり教師が演示したりする。

(2) 交流を大切にしたい表現の場の工夫

①自分の考えを発表する際に、協同的な関わりを根底においた話し方・聞き方のルールを作る。

②適切な表現の方法(言葉・数・式・図・表・グラフ)を選び、矢印などを書き込みながら説明したり、教具などを用いながら説明したりして、話し合いを活性化させる。

4 間接指導について

複式学級では、必然的に直接指導できない場面がでてくる。そのような間接指導の場面では、練習問題などの機械的な作業が多くなりがちである。しかし、自主性を養ったり、協同的に問題を解決したりする重要な時間ととらえなければならない。そのためには、「課題把握」の段階で、しっかりと見通しを持たせることが必要である。「自力解決」をするためのヒントを板書しておくなどの工夫が求められる。間接指導では、単なる発表会にならないよう配慮する。「重点と手立て」(2)②にあるように、児童自身が適切な表現の方法を選び、書き込み、操作しながら分かりやすく説明できるようにする。直接指導に戻る際、学習内容を見取ることにもつながる。留意点として、間接指導の学習の様子を把握し、深化、発展、修正、調整が必要な場合は、直接指導するなど、臨機応変に対応しなければならない。

5 研究の方法

(1) 理論研究

学習指導要領や文献、研修会の参加などにより、教材開発のあり方、基礎的学力の定着・習熟のあり方などの研究を行う。

(2) 実践研究

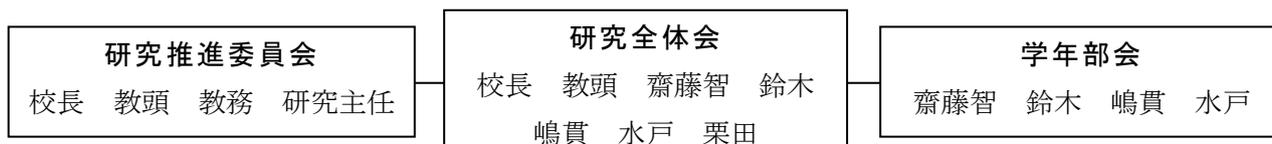
<年間>

- 毎時間の授業の充実、教材・教具の工夫
- 算数科における基礎学力の到達目標を設定し、1年生から6年生までを見通した取り組みを行う。
- 学力充実期間を設け、基礎学力の定着を図る。
- 児童の実態調査をし、変容を明らかにする。

<研究授業>

- 1人1授業の研究授業を行い、教材研究を深める。
- 研究の重点をもとに研究授業を行い、成果や課題を明らかにする。
- 「事前研、事後研便り」を発行し、研究授業の視点や成果・課題についての共通認識を図る。

(3) 研究組織



(4) 研究計画

月	日	研究会	研究内容
4	4	校内研究全体会	NRT分析
4	16	研究推進委員会	研究内容について
4	24	校内研究全体会	研究の概要について提案 授業の進め方・複式授業の確認
5	14	校内研究全体会	研究の概要の共通理解 研究授業の進め方について 指導案の書き方
5		校内研究全体会	提案授業（5・6年）
6	6	校内研究全体会	第1回授業研究会事前研（わかくさ）（3・4年）
6	25	校内研究全体会	第1回授業研究会（わかくさ）（3・4年）
7	26	校内研究全体会	研究の推進（基礎・基本の定着） 1学期の学力向上具体策の評価・改善策のまとめ 2学期に向けて
10	31	校内研究全体会	第2回授業研究会事前研（1・2年）（5・6年）
11	27	校内研究全体会	第2回授業研究会（1・2年）（5・6年）
12	25	校内研究全体会	研究の推進（基礎・基本の定着） 2学期の学力向上具体策の評価・改善策のまとめ これまでの成果と課題のまとめ 研究紀要の書き方について
2	18	校内研究全体会	今年度の成果と課題 来年度の研究について

6 研究の全体構造図

